大嘗祭の本義をめぐる研究史

國學院大學助教授
岡田莊司

一

かつて柳田国男は本誌旧版[1]に「御大礼参列感話」と題する所感を発表された。今から七十三年前のことであり、その前年（大正四年）には大正天皇の大嘗祭が斎行され、柳田は大礼使事務官として直接役職に携わっている。

本誌発表に先立って、明治聖徳記念学会主催による講演が行われているが、本誌の短編はその時の要旨と考えられる。まず冒頭において、

我明治聖徳記念学会は此の御大典の問題を徐かに引き続き御研究に最も適当の団体と思ひます。然し此国民共同の強き大感激を惹き起した御大典終了後未だ数月をも経ざる今日、飜て極客観的に此事件を歴史として取扱ひ、若くは追想録として吾々が話をするのは、或は早きに過ぎざるやを疑ひます。

と述べられ、御大礼記録の三種類作成の必要性を説き、最後には、

之を要するに一方では古代のかかる御儀式を鄭重に行はせらるる時にも尚他方では各種の方面に近代的分子が必然的に入り込んでをる事実を見ます以上は、この新旧両分子が如何に相関聯し如何に相消長しその将来や如何と云ふ問題も自然起つて来るのであります。此の問題の解釈は一方に於て科学的進化論の精神を十分汲むことが出

来而して同時に又我国思想生活の過去現在未来に就きて深き同情ある御研究を目的とせらるゝ本学会の諸君が真摯に攻究せらるべきものではなからうかと思ふ。

と結ばれ、示唆に富む提言をされている。どの時代にも新儀と旧例の相剋の中で歴史と文化はつくられる。柳田は近代における、この事態を直視し、「大嘗祭ニ関スル所感」を記したが草稿のみで、この方は公けにはされなかった。[2]

新儀と旧例を考える上で先の昭和天皇の大喪儀は、古代いらいの伝統が失われていった事例の一つといえる。平安中期の儀式書『西宮記』や『類聚雑例』（『左経記』の抄出本、後一条天皇の葬送を記す）によると、藁沓・白杖を用いており、これは古来の葬法に属する。室町時代の『誉田宗廟縁起』や孝明天皇の葬送絵図にも、公卿・殿上人らが杖をついており、藁沓をはき白杖（桐杖）を持つことは、死出の旅路へ導く役割をもっている。これは天皇葬送に限らず、葬儀社が関わる最近の葬礼以前の、近年までつづいていた民間の野辺送りの葬送にも、よくみられた形式であった。この古例は、明治・大正天皇の大喪儀にも行われたが、今回はじめて断絶してしまった。柳田が生きておられたら、先生は何と仰言ったであろうか。ミニ鳥居や徒列の弓矢が失われていったことは多少なりともとりあげられていたが、藁沓と白杖の断絶については全く問題視されず、民俗史上の大きな汚点となろう。せめて徒列の先頭に立つ大喪儀委員がモーニング姿ではなく、一人だけでも衣冠・素服に藁沓・白杖の姿で先帝の霊輦を死出の旅路に導びく必要があった。前回までは葬送に加わった殆どの人（高等官）が、藁沓・白杖姿であったが、全員がそうする必要はない。徒列を先導する一人が、その装束を着けることによって儀礼の象徴性は表現されるのだから。

大正の大嘗祭についで、昭和の大嘗祭に柳田は直接関わることはなく、朝日新聞論説委員として、「御発輦」「大嘗宮の御儀」「大嘗祭と国民」を新聞紙上に発表した。[3] 昭和三年十一月十二日付「大嘗祭と国民」には、

夜の御祭には本来説いてはならぬ部分があるかも知れぬ。私なども一たび前御代の御式には與かつた者であるが、今考へると唯きらきらと光るものが、眼の前を過ぎたといふ感じである。しかし言辞をもつて伝へ得ざる點は、

人は感覚によつてこれを永世にしようとしてゐた。さうして今日の奉仕者の多数は、遠く神域の外にあつて、書冊に由つて始めて学ばうといふ人である。彼等をしておのづから会得せしむべき新なる学問の発達することも、また恐らくはこの時代の要求であらうと思ふ。（「大阪朝日新聞」）

と大嘗祭に関する新たな学問の発展を予言されている。

大嘗祭研究史の始源としては、室町中期に五百年来の学者と称された一条兼良の『代始和抄』が挙げられる。同書には「卯日は神膳を供ぜらる、其儀ことなる重事たるによりて委しく記すに及ばず、（中略）秘事口伝さまざまなれば、たやすくかきのする事あたはず、主上のしろしめす外は、時の関白・宮主などの外は曽てしる人なし、まさしく天照おほん神をおろし奉りて天子みづから神食をすゝめ申さるゝ事なれば、一代一度の重事これにすぐべからず」とある論が、宮中の諸儀式に通じていた立場からの穏当な見解である。これ以降も、この論をしのぐ研究の展開はみられなかった。

大嘗の祭儀については、卯日の夜半から斎行される嘗殿二殿における悠紀・主基の神事を中心としており、とくに神座と祭神の問題は、その本義を考える上で、長い間、主要なテーマとされてきた。

昭和度の大嘗祭に際会した柳田国男は、新たな学問的発展を予測する論陣を張ったが、自らが民俗学の立場から学問的に本格的研究に立入ることはなかった。むしろ、この論の先頭に立ったのは、後述するとおり、柳田を師と仰ぎつづけた折口信夫であった。

管見に及んだ限りにおいて、柳田がその本義に直接言及されたのは終戦後のことである。それも折口信夫が亡くなられた二ケ月後、昭和二十八年十一月、にひなめ研究会編『新嘗の研究』第一輯に収録された「稲の産屋」[4]が殆ど唯一のものといってよい。折口在生中に執筆されたものであろうが、同書は結局折口の目に触れることはなかった。

「稲の産屋」の内容は多岐にわたっているが、ここには大嘗祭（またその祖型である新嘗）の本義にかかわる大切な

事項が述べられている。佐伯有清氏は「大嘗祭の本質についての核心に切り込んだ論が見うけられず、柳田の大嘗祭についての研究は、ついに未完に終ってしまったのである」[5]と結論づけられているが、私はそうは思わない。柳田が論じられた中から、近稿[6]にとりあげた二項を掲げると、

(一) この大嘗の日の神殿の奥に、迎へたまふ大神はただ一座、それも御褥御枕を備へ、御沓杖等を用意して、祭儀の中心を為すものは神と君と、同時の御食事をなされる、寧ろ単純素朴に過ぎたとも思はれる行事であつた。(「稲の産屋」一九六頁)

(二) 畏れ多い推定ながら、天の長田といふやうな大切な稲栽培地が皇室にも属して居て、年々の斎田を卜定なされる必要は無い時代が遠い昔にはあり、所謂大新嘗は後代の各地の相嘗と、もう少し近いものだつたのではあるまいか。(同、一九八頁)

右の(一)は嘗殿における天皇親祭祭祀を簡明に論説したものであり、(二)は祭儀に必要とする稲の御田についての見解であり、「倭の屯田」の所在を通して考察した私見とも完全に一致する。柳田の(一)(二)説は、大嘗そして新嘗の淵源、即ち本義を明らかにする上で、重要な提言であった。

ここで注意しておきたいことは、「稲の産屋」の執筆に当って、既に昭和三年に折口信夫が論じて世上に流布していた〝真床覆衾〟論や天皇霊について、何一つ触れられていないことである。意図的に論及することを避けたとも考えられ、交友の深かった折口に対して、大嘗祭の本義に関する事項については、柳田の学問的領域からは相容れることができなかったのではなかろうか。これは単なる推測にすぎないが、折口へ批判の鋒先を向けず、無視することで柳田の意志を表示したのではなかったか。

二

柳田が意識していたと思われる折口信夫の大嘗祭論は、主に昭和三年の大嘗祭前後に集中している。なかでも必ず後学の研究者が引用するのが、『折口信夫全集』第三巻（昭和三十年刊）に収録された「大嘗祭の本義」であり、同論考は昭和五年刊行の『古代研究』民俗学篇第二冊に基づいている。同書の巻末には、

此書物の中から、私の現在の考へ方を捜り出さうとするのは、無理である。実は、今におき、悩んでゐる。日々、不見識な豹変を重ねてゐるのだから。（中略）民俗学篇でも、「村々の祭り」と「大嘗祭の本義」との間には、実際、御覧に入れたくないほど、考への変化がある。この論文は半年も立たぬ間に、出来たものなのである。其でゐて、かうである。かうした真の意味の仮説を、学界に提供する事は、わるいとも言へよう。又、よいとも言へる。其は、結論を度外視した顔のとりすました学者の為に、一人で罪を負ふ懺法としての、役に立ちさうだからである。慎重な態度を重んずる、庠序学派の人々は、此を、自身の学問と一つに竝べるをさへ、屑しとせないであらう。

と「追ひ書き」を記し、「大嘗祭の本義」が短期間に書かれ、自ら「仮説」であることを断言された。従来の神道研究に飽き足りなかったことが窺えるとともに、閉鎖的な学界に対する警告の意味も含まれていた。

『古代研究』および全集に再録された「大嘗祭の本義」は、完稿に至るまでには、論説の内容に刻々と変化があったようである。同文は、

「国学院雑誌」第三十四巻第八・十一号

昭和三年九月信濃教育会東部々会講演筆記

などに基づいて集成された。但し、後者の講演日時は、昭和三年六月二十九・三十日の両日、長野県東筑摩郡教育会中央部支会の主催で行われた「大嘗祭の本義」の講演が正しいようである。[7]「国学院雑誌」には同年八月号に「大嘗祭の風俗歌」、同年十一月号（御大礼奉祝号・下）に「大嘗祭の本義ならびに風俗歌と真床襲衾」と題する論稿が（談）

話の形で載せられている。このほかに十月九・十日に弟子に浄書させた内容の異なる同名の「大嘗祭の本義」と書かれた未完の草稿も残されている。(8)

大嘗祭の本義といえば、卯日の悠紀・主基の神事にあり、それは天皇親自ら神饌の御供進・共食と〝真床覆(追)衾〟の秘儀から成り立っていると一般に信じられ通説とされてきた。これは六十年前の折口説の影響が大きい。前者については、一条兼良の指摘にもあるとおり異論を挾む余地はないが、後者については、無批判に折口の推論がまかり通ってきた。しかも折口自身が「仮説」と称して学界に提示された推論が、そのまま定着し、その後の研究史の中で、柳田も避けて通り、実証的研究対象としてとりあげられることは近年まで殆どなかった。

「大嘗祭の本義ならびに風俗歌と真床襲衾」(前掲「国学院雑誌」)に収載された談話形式の中で、「私は大嘗宮に於ける御衾が、神代紀に見えた真床襲衾(マドコオフスマ)で、これにお籠りになる聖なる御方が、新しい悠紀・主基の外来魂をとりこんで、立ち直られることを中心として、大嘗祭の御儀を、ほのかながら、御観察申しあげたいのである」と結んで〝どぢめ〟とされている。右の雑誌論考、講演や未完の草稿などを基に完稿したのが流布本の「大嘗祭の本義」と考えてよいだろう。

以下、折口論の重要部分を全集第三巻より掲出してみると、

(一) 恐れ多い事であるが、昔は、天子様の御身体は、魂の容れ物である、と考へられて居た。天子様の御身体の事をすめみまのみことと申し上げて居た。(略)此すめみまの命に、天皇霊が這入つて、そこで、天子様はえらい御方となられるのである。(一九三頁)

(二) 大嘗祭の時の、悠紀・主基両殿の中には、ちやんと御寝所が設けられてあつて、蓐・衾がある。褥を置いて、掛け布団や、枕も備へられてある。此は、日の皇子となられる御方が、資格完成の為に、此御寝所に引き籠つて、深い御物忌みをなされる場所である。実に、重大なる鎮魂(ミタマフリ)の行事である。此處に設けられて居る衾は、魂が身体

へ這入るまで、引き籠つて居る為のものである。（一九五頁）

㈢　此重大な復活鎮魂が、毎年繰り返されるので、神今食・新嘗祭にも、褥が設けられたりする事になる。大嘗祭と同一な様式で設けられる。復活を完全にせられる為である。日本紀の神代の巻を見ると、此布団の事を、真床襲衾（マドコオフスマ）と申して居る。彼のにゝぎの尊が天降りせられる時には、此を被つて居られた。此真床襲衾（マドコオフスマ）こそ、大嘗祭の褥裳を考へるよすがともなり、皇太子（ヒツギノミコ）の物忌みの生活を考へるよすがともなる。物忌みの期間中、外の日を避ける為にかぶるものが、真床襲衾（マドコオフスマ）である。此を取り除いた時に、完全な天子様となるのである。（一九六頁）

右は㈠が天皇霊、㈡㈢が〝真床覆衾〟に関する直観力にすぐれた折口ならではの「仮説」であり、折口説の核心部分の論が展開されている。この感性豊かな折口説を直接に、また無意識に継承していった論考は、神道・文学・民俗・歴史など各方面にわたって枚挙の遑のないほどである。[9]

大嘗祭の本義をめぐる折口の核心部（〝真床覆衾〟論）については、歴史学の方面からの綿密な論証が必要とされるが、従来、この方向からの研究蓄積は薄かった。

歴史学における近年の動向を掲げてみると、昭和五十一年三月に早川庄八氏は「律令制と天皇」[10]において、大嘗・新嘗とほぼ同祭儀である神今食について「神との共食のほかに、傍らに敷かれた八重畳の上でいわゆるマトコオブスマの秘儀が行なわれた筈であるが、その詳細は知りえない」「神今食には、神との共食とマトコオブスマとの二つの秘儀が行なわれた」とされ、新嘗祭についても前者を述べ、「天皇一人、深夜神嘉殿にこもって神とこれを共食し、祖神と結合することによって王としての新たな生命を獲得したのであった。だから、神事を畢えて神嘉殿を出て、その外に居並ぶ官人の前に姿をあらわした天皇は、もはやそれまでの天皇ではなく、新たに再生した王であった筈である」といって折口の名と論文名を明らかにはされなかったが、折口説を継受した内容になっている。

ついで同年十二月に刊行された岩波日本思想大系『律令』神祇令の注において、井上光貞氏は「天皇は大嘗宮に入

って浴湯ののち、悠紀正殿に入って神饌を供し、みずからも御饌を食し（御衾の秘儀もこの間おこなわれる）、同じことが深夜、主基正殿でもおこなわれる」と解説され、早川氏と同様の見解を示された。[11]

その後も東大古代史グループは、折口の推論を受け継ぎ、現在に至っている。平成元年三月に刊行された岩波新日本古典文学大系『続日本紀』第一巻の補注にも、新嘗祭について「神との共食とともにマトコオフスマの秘儀が行われたが、その詳細は知りえない」と述べ、月次祭の項においても「天皇は中和院内の神嘉殿において二度にわたり神と共食する。またマトコオフスマの秘儀を行う」（早川庄八執筆）と記され、六十年にわたって岡田精司氏など一部に批判はあるものの、「仮説」のまま実証史学の中にも、正統論として生きつづけ不動の地位を築いてきた。

三

折口の「仮説」である、新帝が〝真床覆衾〟にくるまる秘儀のあったことを論じた推論が、主に東大実証歴史学に継受されていったのはなぜか。ここに近代神道史学の創始者である宮地直一の存在を考えてみたい。

宮地は神道史に関する数多くの先駆的業績を発表してきたが、大嘗祭に言及することは殆どなく、昭和三年の大嘗祭においても論文らしい内容は発表していない。それは内務省に勤めていた関係上、発表を遠慮したとも考えられる。翌昭和四年の神宮式年遷宮に際して数編の論著を発表しているのに比べて、大きな違いである。

宮地は昭和十三年、東京帝大の神道講座の主任教授に迎えられた。その時の講義案[12]には鎮魂祭について、

天皇は天皇としての天皇霊・天皇魂を持つておいでになる。その霊魂は天祖天照大神以来終始一貫して天皇の御肉体の中に宿つて居る、肉体は霊魂の容器であり、天皇の天皇たる本質はその中に宿在する天皇霊・天皇魂である、さうしてその天皇霊・天皇魂を発揮せしめ奉つて、天皇の天皇たる実を表現し奉るべく神秘の方術を執り行ふのがこの祭であらうと。（中略）いつからか新嘗祭と結び、之が予備的行事のやうになつた。それは天皇が霊

的に最も完全なる状態、神としての御資格を具有せられて、之に奉仕せらるべきであるからであるとも解することが出来る。

と述べられており、この天皇霊の見解は、先の折口の㈠の所説と殆ど同一である。右の鎮魂祭の解釈は、折口の推論の継受と考えられる。

宮地直一と折口信夫とは、同年代であったが、学問的方法論に大きな違いがあり、二人は必ずしも好い関係はもっていなかったと聞いている。しかし、天皇霊の解釈や〝真床覆衾〟論には、あえて反論はせず、むしろ折口の推論を受容していた節がある。宮地の東大神道講座における講義内容は、その後においても影響を与えつづけてきたといえるであろう。

これに対して宮地の弟子であった西田長男氏は昭和三十年代頃から折口学に接近していったが、折口の大嘗祭論については懐疑的であった。昭和五十年の神道宗教学会大会の共同討議「践祚大嘗祭をめぐって」[13]の質問で次のような発言を行っている。

大嘗祭の本義ということでございますが、それに関連しまして真床御衾というものの問題がございます。これにお入りになりまして、その位を持つということでございますが、学生時代に最も大きな疑問を持ったのでありますが、今もその疑問を持っているのでありますが、これの存在が確かなものかどうかということによりまして、今日の大嘗祭の本義というものが崩れて来るのじゃないかと、こう思うんです。

そこで古社の御神座の様子を考えてみますというと、大嘗宮の作りに非常に似ているという点が考えられるわけでございます。神いますが如く、ということで、神様のお褥、つまりベッドですね。それから枕とか蒲団とかの品々が設けてある。（中略）だから、神社の内陣にも真床御衾があると云えますし、大嘗宮だけに真床御衾があるというのではないと思います。神様がいらっしゃるのですから、神社にも大嘗宮と同じ設けがあってよいと

おもいます。これが学生時代からの素朴な疑問でした。

この西田が提示した素朴な疑問に、私も全く同感である。柳田が昭和の大嘗祭に「新なる学問の発達」の必要性を予測されたが、明年の平成の大嘗祭に向けて、六十年にわたって継承されてきた折口「仮説」を、根本から実証的に問い直すことが緊急の課題となろう。

折口の「仮説」である嘗殿の第一神座に設けられる寝座・寝具（御衾）に『紀』神代巻に見える皇孫ニニギノミコトが真床覆衾にくるまれて天孫降臨されたこと、この寝具に新帝がお入りになり、外来魂の「まなあ」である天皇霊を付着すること。即ち〝真床覆衾〟論と天皇霊継承の問題は、折口「仮説」にとって一体のものと意識されている。

しかし、この天皇霊についても、『敏達天皇紀』にみえる「天地諸神及天皇霊」が、そのまま大嘗・新嘗の祭儀に作用したものとは考えにくく、「皇祖之霊」の擁護・恩頼をうけることはあっても、天皇の体内に天皇霊が祭儀を経て入るという見解には、これも岡田精司氏の批判[14]があり、皇位継承儀礼の中に、その存在を認めることはできない。

四

柳田国男と折口信夫の大嘗祭論（新嘗も含めて）には、大きな乖離がある。しかも折口は「仮説」でありながら、大嘗祭研究史に大きな影響を与えつづけてきた。しかも、その本格的検証はないまま。一方の柳田の見解には、文献研究の立場からも充分納得できる整合性をもっている。

私の理解する大嘗と新嘗は、近稿[15]にも触れておいたように、天皇親祭による神膳の御供進と共食にあり、いわゆる〝真床覆衾〟にくるまる秘儀は全く無かったと考えている。秘儀とは前者のみをさし、それは神社祭祀、神職奉仕の本旨とも共通するもので、秘儀と呼ばれる特別の儀礼があるわけではない。伊勢の大御饌供進が秘儀とされているのと同様、口外せず、人前に見せず、神と人（天皇）のみの交歓がはかられることに、本義が存する。

従って大嘗祭を斎行することで天皇位が得られるのではなく、天皇の地位につかれた祭祀権者が親祭を執り行うことに重要な意味をもっている。摂政といえども天皇以外の代行は叶わなかったことは摂政忠通の『大嘗会卯日御記』に詳しく記録されているところである。嘗殿内に設けられた神座（寝具をおいた寝座）は客人として迎えられた神祖（天照大神）がお休みになられるために、見立てられた「神聖な場」であり、ここには天皇といえども近寄ることは許されなかったであろう。また岡田精司氏らの唱える聖婚儀礼説も、神座（寝座）に接することができなければ成り立ちえない。平安後期から記録に残される天照大神に加えて天神地祇が祀られることは律令祭祀の整備を経た後次的なものと思われる。

本稿では文献を用いての本格的大嘗祭論まで立入ることは紙幅の関係からできず、柳田、折口の大嘗祭の本義にかかわる問題を紹介していくことを中心にした。近年の大嘗祭研究の新たな発展については、改めて私説を論じる別稿を用意しているので、その中で言及していくことにしたい。

註

（1）「明治聖徳記念学会紀要」第五巻（大正五年五月刊）、『定本柳田国男集』には未収録。近年、佐伯有清『柳田国男と古代史』の附編に「大嘗祭より大饗まで」（「新日本」五巻十二号）とともに再録された。

（2）『定本柳田国男集』第三十一巻。詳しくは佐伯有清「柳田国男と大嘗祭」（『柳田国男と古代史』所収）。

（3）佐伯有清、前掲論文。「大嘗祭と国民」は『定本柳田国男集』第三十一巻所収。

（4）『定本柳田国男集』第一巻。

（5）佐伯有清、前掲論文。

（6）拙稿「大嘗・新嘗の淵源—倭屯田を訪ねて—」（「大美和」七七号）。

（7）折口博士記念古代研究所編『折口信夫手帖』。角川文庫『古代研究Ⅲ』（「解説・折口信夫研究」加藤守雄執筆）。関係資料については折口博士記念古代研究所・岡野弘彦所長から御教示をいただきました。記して感謝の意を表します。

（8）「折口博士記念古代研究所紀要」第三輯（昭和五二年三月）。流布本「大嘗祭の本義」とともに草稿も、折口の大嘗祭論を考察する上で貴重である。

「大嘗祭りの宵の悠紀殿の儀は、元の日のみ子の「まつりごと」の覆奏で、其間新しく現出ますべき方に、衾の中に籠つてゐられる。其式が済んで、鎮魂式の後、天皇霊その他の威霊を得て、元の方の復活せられた形で、物忌みから離れて斎湯に入つて、神の資格を得る。さうして、其場で、乳母の乳、飯嚼の飯によつて、外来の進められる威霊―食国の魂―を躬に固着しめる。」「悠紀殿の御衾は、元の日のみ子の籠り居給ふと考へたのである。主基殿のは、次の日の御子の籠らせられるもので、二つに分かれてゐても、同じ衾一つ大御身のお出でになるものと信じた長い時代の後、其を形式上に長く守る様になつたのだ。此衾は、天孫降臨の際、身に被つて居られた「真床襲衾」で、地上にある。その時、あもり着くまで脱がれなかつた。其をふりのけて出られたのが、御母神並びに、天上の父神の魂のふれついた時である」と記されている。天皇霊と〝真床覆衾〟について触れているが、その論には若干の違いがみられ、十月初旬に至っても自説が未だ定っていなかったことが想像される。

（9）本稿がほぼ書き終った頃、皇学館大学神道研究所編『続大嘗祭の研究』が送られてきた。同書には詳細な研究目録が巻末に収められている。それによると、大嘗祭およびその周辺を対象とした研究著書は二百点以上、論文も五百点以上を数え、重複はあるものの、併せると八百点に近い研究蓄積がある。しかし、大嘗祭の本義について正面からとりあげた論考は以外に少ない。しかも折口論の継承が殆どといってよい。

（10）早川庄八「律令制と天皇」（「史学雑誌」八五編三号、のち『日本古代官僚制の研究』所収）。

（11）井上光貞『日本古代の王権と祭祀』に再録、昭和五九年。

（12）『神道史序説』第三篇「上代神道史要義」（『宮地直一論集』第五巻）。

（13）「神道宗教」八三号。

(14) 岡田精司「大王就任儀礼の原形とその展開」(『天皇代替り儀式の歴史的展開』)。折口の天皇霊論を引き継ぐ見解としては、岡田実「天皇霊私考」(「国学院雑誌」六〇巻八号)、宮田登『生き神信仰』など、数多い。

(15) 拙稿「(談話室) 真床覆衾と〝国学院流神道〟」(「国学院雑誌」九十巻七号)。

〔追記〕校正中に宮下矩雄氏(当時、宮内庁掌典職)の「宮中祭祀と神宮祭祀の一体性について」(「瑞垣」一〇六号、昭和五十年)と題する論稿に接した。

十一月二十三日の夕刻、神嘉殿に皇祖天照大御神始め諸神を招じ、天皇陛下親しく新穀の御飯・御酒を神々に御饗(みあえ)し、また御自身も大御神と御対座で召し上がられ、更に八重薦(やえだたみ)の寝座(しんざ)に一夜大神の御寝を願った後、再び暁の御饗を共食あらせられる、即ち国土のいのちの稔りを神々と共に主上みずからきこしめされ、国民統合の象徴としての御力を益々あらたかに備えられる神聖な一夜である。

(中略)

少なくとも記録の存する京都御所時代以来、御歴代天皇は新嘗祭には伊勢の方角より神を迎えて御饗(みあえ)を捧げて来られた。即ち対象の神はいつ頃からか皇祖始め天神地祇となったけれども、本則的には、江家次第秘抄巻十五践祚大嘗会「悠紀」の語に註している如く「御祭りなさる、神は天照大神御一体也」であって、爾余の神々は大御神の後方に侍る御立場であるとしてよい。

即ち新嘗祭は天皇陛下と最高の賓客皇祖天照大御神とが一つ屋の内で御対座に行わせられる日本国至高至聖の「あえのこと」と申してよいであろう。

右は私の考えている大嘗祭の本義と共通するところが多く、毎年、宮中新嘗祭に奉仕されてこられた宮内庁掌典職の方の発言であるだけに、大いに勇気づけられた。十四年前の発表になるものであるが、あえて掲出させていただいた。